

第四章 精神と宗教

4 - 1	精神とは - ドイツ観念論とキリスト教思想 -	10/5
4 - 2	生の次元論と精神 - 新しい次元の創発性の理論化に向けて -	10/19
4 - 3	社会システム論とパラドックス - ルーマン -	11/2, 9, 16
4 - 4	カオスと自己組織化	11/30, 12/7
4 - 5	まとめ	12/14

第四章 精神と宗教4 - 1 精神とは - ドイツ観念論とキリスト教思想 -4 - 2 生の次元論と精神

- 新しい次元の創発性の理論化に向けて -

宗教を、精神の次元における生 = システムという枠組みで議論する

システムと機能という議論 (システム哲学・社会システム論) を手がかりに

文化における宗教の機能

次元の創発性、自己組織化

4 - 3 社会システム論とパラドックス

- ルーマン -

1. 社会システム論と宗教論
2. ルーマンの社会システム論と宗教
3. 宗教とパラドックス

1. 社会システム論と宗教論

0. 自己と他者の関係づけのモデル

視覚・内省モデル / コミュニケーションモデル

見る	語る
自己省察	関係性 (自己 / 他者)
意識の明証性	解釈学的循環・歴史性
デカルト、カント	シュライアーマッハー、キルケゴール
現象学	ハーバーマス、アーペル

ルーマン

1. 実体的規定から機能的規定へ

2. 一般システム論

科学における「分析的手法」(対象は部分に分解される、部分の振る舞いの記述は線形的である)の限界の認識から生じた。

システム (相互作用する要素の集合) は諸部分の総和以上である。

全体論

システムの諸部分は互いに相互作用しており、それは非線形的な記述を要求する

開放システム、階層的システム

3. 集合論・グラフ理論・ネット理論、サイバネティクス、情報理論、オートマン理論、ゲーム理論から、生命、社会、生態系、宇宙へ

4. 現代社会学の展開：パーソンズからルーマンへ

社会システム：一定の環境内で、相互に指示し合う社会的行為の意味連関の総体
構造 - 機能主義から、機能 - 構造主義へ。システム・構造・機能

構造 - 機能主義：特定の構造をもった社会システムを前提に、社会的に形成されたものの存続を可能にするのにどんな機能な働きが必要かを論じる。社会システム存続のための機能分析。構造・適応・均衡・安定性というキーワード。現状の正当化という傾向。

機能 - 構造主義：機能概念を優先させる。社会システムは特定の構造（価値範型や構造範型による）によっては定義されない。社会システムとは相互に指示し合う社会的行為連関である。自己組織化による構造の生成過程が問われる。

5. パーソンズ

社会システムの均衡理論（行為体系、有機体的世界、超経験的世界、物理・化学システムと接する）

適応（A）：システムが維持するために、状況を統制する手段を提供する。経済目的達成（G）：行動によって充足・達成される目標を設定する。政治。

統合（I）：メンバーを相互に結びつけ規範的統制をはかる。組織、ネットワークの領域。道徳・法律・慣習。

潜在的パターンの維持と緊張の処理（L）：メンバーの内面における文化・価値・規範意識・アイデンティティを形成保持する。

宗教は行為システム内のいずれかのサブシステムに帰属するものではなく、すべてのサブシステムと直接関係する。しかし、制度化された宗教は、Lの部分に位置づけられる。一般的に宗教の機能はパターンを維持するという精神的面での統合機能と、システム維持にとって危険となる不満をそらせる機能をもつ。

人間の条件：物理・化学システム（A）、人間的有機体システム（G）、行為システム（I）、超経験的世界（L）

行為システム（I）：行動システム（a）、パーソナリティシステム（g）、社会システム（i）、文化システム（l）

文化システム（中期）と超経験的世界（後期）にの関わる宗教

6. 前期ルーマンの社会システム論

システムと環境（システムの内と外の差異化）、それらを包括する世界

社会システム：相互行為システム / 組織体システム / ゲゼルシャフト・システム
システムを機能から分析する。或る機能は他の機能によって置き換え可能である
システムの複雑性(Komplexität)：システムは現に現実化している状態以外の無数の可能性を有する。多数の要素の選択可能性

複雑性の縮退(Reduktion von Komplexität)：社会システムの中心的機能

可能性の選択作用としての意味機能。選択 = 排除

複雑度の落差 = システムの内と外の境界設定

世界の中で、複雑度の低い領域を形成し、行為の方向付け・予測を可能にする
世界を複雑性の縮減によって処理しようとする

7. 宗教論 (『宗教の機能』1977年)

- ・宗教が社会を統合する機能を有することはデータに矛盾する
- ・意味から宗教へ

意味：過剰な可能性から特定の可能性を選択すること

意味システムは自己参照的に閉じたシステムである(循環性)。複雑度の落差によって、境界の外 = 周囲には規定不可能な環境が存在し、システムにとって環境は自己参照を中断させる非 - 我・我々として現れる。安らぎのない自己関係。

- ・宗教：聖なるものという暗号によって、究極的に規定不可能なものを規定可能なものへと変換する機能

人間の経験と社会行為の有意味性の保証

<文献> (今回は日本語で読めるものに限定)

0. パーソンズ 『文化システム論』ミネルヴァ書房
1. ルーマン 『宗教社会学 宗教の機能』新泉社
『システム理論のパラダイム転換』お茶の水書房
『自己言及性について』国文社
『宗教論』法政大学出版局、など
2. 小笠原真 『二十世紀の宗教社会学』世界思想社
3. 中 久郎編 『現代社会学の諸理論』世界思想社
4. 今田高俊 『自己組織化 社会理論の復活』創文社
5. 飯田剛史 『在日コリアンの宗教と祭り 民族と宗教の社会学』世界思想社
6. 厚東洋輔、今田高俊、友枝敏雄 『社会理論の新領域』東京大学出版会
7. 高橋 徹 『意味の歴史社会学 ルーマンの近代ゼマンティック論』世界思想社
8. 村中知子編 『ルーマン理論の可能性』恒星社厚生閣
9. クニール/ナセヒ 『ルーマン 社会システム理論』新泉社
10. 土方 透編 『ルーマン/来るべき知』勁草書房
11. 伊藤重行 『システム哲学序説』勁草書房
12. ベルタランフィ 『一般システム理論』みすず書房
13. 芦名定道 『宗教学のエッセンス』『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版